# 江戸川大学国立公園研究所から

執筆担当：土屋　薫

## 大学における『年度当初』の年中行事

この原稿を執筆している年度当初、筆者の奉職している大学においては、毎年同じような場面に出くわす。それは、新入生が時間割の作成に腐心というか苦心しているさまである。シラバスや時間割表を食い入るように見つめているかと思えば、苦悶の顔を浮かべたりしている訳を問うと、「もうどうしていいか分からないんです」という答えが返ってくる。

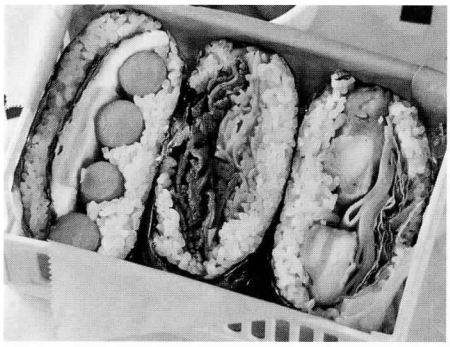
もう少し詳しく尋ねてみると、どうやら授業という苦役・苦行をどう分散するか、嫌な仕事を最低限に留めるためにはどうすればいいのか、というイメージのようである。そのとき毎年決まって口にするアドバイスは、「今ケーキ屋さんの店頭にいるとすると、どのケーキにするか悩んでいるところになるよね。実は今が一番楽しいときのハズ。選んで買ってしまったら後は食べるしかないからね。どんなものを食べたいのか、たのしく悩みましょう。」

## 『おにぎらず』方式は身を結ぶか？

私がこの連載の場で考えているのは、常に国立公園の利用促進についてというテーマなのだが、今回は、先に挙げた大学における年度当初の「年中行事」で直面したことをヒントに話を進めてみたい。この大学におけるエピソードを、「実は利用していないときにも国立公園のたのしみ方があるのではないか」という前提に置き換えて検討を進めてみよう、ということである。

「やってはいないけれども、やったのと同じような、もしくはそれ以上の効果がある」という代表例として、唐突ではあるが、ここでは「おにぎらず」の事例から考えてみたい。

ご存知の通り、「おにぎらず」は二〇一四年秋ごろからネット上で注目され始め、二〇一五年にブームとなった食べ物のレシピだが、具材や製法は「おにぎり」とほぼ同じものの、最後に「ひと押し」するかどうかで、呼び名が変わってくる。言葉通り「にぎらない」ところが、「おにぎらず」と呼ばれるゆえんである。おいしさや味わい、その根拠等については諸説あるのでここでは触れないが、中に入れ込む「タネ」の量を除けば、両者にそれほどの大きな隔たりはないと筆者は考えている。



おにぎらず

「おにぎり」ならぬ「おにぎらず」と同様に、「国立公園に行かず」で利用促進は成り立つのか？ここでは一足飛びに国立公園にまで行かず、まず「まちあるき」で考えてみよう。いや「まちあるかず」である。

## 『まちあるき』のたのしみはどこにあるか？

もちろん「まちあるき」は、現地に行ってこそである。自然や景観やまちなみ、その風情や雰囲気、ご当地に関わる歴史やそれを連想させる暮らしぶり、店舗やそこに息づく人たちとの交流等がまちあるきの醍醐味であることは間違いない。まちを歩く行為自体がおにぎり（おにぎらず）の「ごはん」であり、上記の醍醐味に当たるものがおにぎり（おにぎらず）の「タネ」に当たるものと言えるだろう。

では現地に行けば、現地に行って歩けば即「まちあるき」の魅力を堪能できるのか？　例えば、目隠しされて自動車に乗せられてどこか知らないところへ連れて行かれ、ポンと下ろされて目隠しを外されて、「さぁ、まちあるきを楽しんで」と言われて背中を押されても（実際にはこんな状況はあり

得ないが）、面食らってしまうだけだろう。上述のようなまちの魅力を堪能するためには、そのまちについて、そのまちやそこに暮らす人たちのことを幾ばくか知っていて初めて、そのたのしみや味わいも出てくるというものだろう。

現地に行く前に、現地ではないところで、現地のことを事前に知る時間の中に、現地でのたのしみを増幅させるスパイスが含まれているのは確かなことだろう。「まちあるき」には「まちあるかず」という事前のたのしみがあり、現地で味わえる実際のたのしみもあるとして、それでは事後はどうだろう？

写真アルバムや個人日記、今どきで言えばSNS等は、思い出を鮮明にし、個人のライフヒストリーにおける前後のつながりを思い起こさせてくれるに違いない。そしてやはり現地ではなく「まちあるかず」の中で個人のストーリーとして蓄積されていくことになる。

ここで「おにぎらず」を成立させているアイテムについて確認しておくと、ごはんと「タネ」を包む海苔、さらにそれを包み込むラップということになる。またそれらにくるんだ後で「そっと半分に切って」人目につくようにしたところにブームになってヒットした理由があると考えられる。それでは「まちあるかず」にとってこの海苔やラップ、そして「半分に切る」ことに当たるものは何なのだろう。

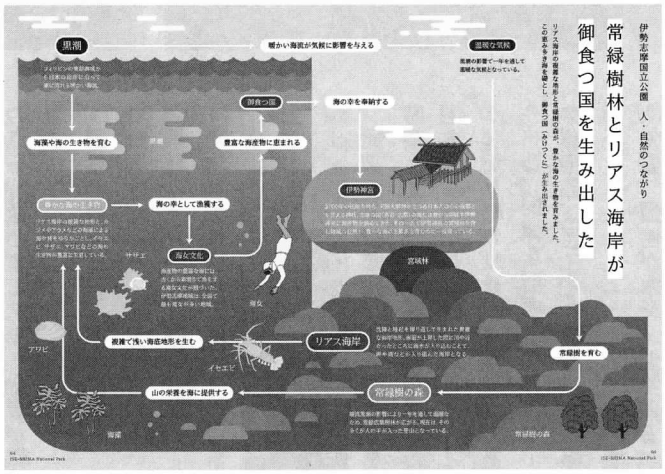
手軽に無尽蔵と言えるほどたくさん撮れるスマホの写真やデジタル化による日付・撮影場所情報の管理、あるいはそれらの検索性の向上は、写真店への現像やアルバムへの整理といった「ひと押し」の手間を省いてくれるだけでなく、記憶や思い出の掘り起こしを容易にしてくれるだろう。言い換えれば、日常化したDXが「まちあるかず」におけるラップだったことが分かる。

## 国立公園満喫プロジェクトにおける『ストーリー集』

そして国立公園である。昨今、国立公園で「ストーリー」と言えば、国立公園満喫プロジェクトにおける「ストーリー集」（図）の位置付けが気になるところである。[1] これはプロジェクトの対象となった国立公園に関わる土地の記憶に当たるストーリー、つまり当該国立公園設立の背景に当たる部分についてまとめられたものである。ただ、ここには事後の「まちあるかず」のような個人のストーリーに関わるフックは想定されていない。

たとえ「まちあるかず」と同様にDXの日常化が実現していたとしても、それと同時に、年号や季節、記念行事、来訪者のファッションや髪型、土産物といった風俗、ガイドや店の主人といったキーパーソン等のやりとり、周辺の改修・整備事業といった情報とセットになって初めて、国立公園はもっと個人のストーリーの中に入り込んでくるのではないだろうか。

こうした事後の展開を前提として、上記に当たるサインや情報、記録を公的なアーカイブとして整え、ネットで容易に確認できるような仕組みを想定しながら現地をマネジメントしていくことこそ、国立公園の利用促進における「おにぎらずのラップ」になるのではないだろうか。また、こうしてつくられた個人的な「おにぎらず」を紹介しあう場を作ることこそ、真の意味での「ストーリー集」になると思われるのである。



伊勢志摩国立公園_ストーリー集より

註

(1) 土屋薫（二〇二五）「国立公園満喫プロジェクトの評価軸に関する考察―消費概念と関係人口の視点から―」『江戸川大学国立公園研究所年次報告』九

**土屋　薫●つちや　かおる**
日本レジャー・レクリエーション学会理事、コミュニティ政策学会理事、青森大学社会学科、江戸川大学ライフデザイン学科准教授を経て、二〇一四年より江戸川大学現代社会学科教授。専門はレジャー社会学、レジャー教育。二〇二四年よりIR推進室長。二〇二五年より図書館長。